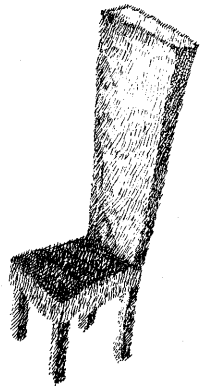


特集〈慣れる〉

焦らず ゆっくりと！

内村 真奈美



泣かない子たち

「最近の子は泣かないね」「泣く子が少なくなつたよね」「新年度ではないみたい」「以前はもっと慌ただしかったよね」「本当にこれでいいのかな」

近年、私の保育園でこのような会話が交わされるようになりました。

以前は、泣いたり、たとえ泣かなくても「行きたくない」「嫌だ」と身体全体で抵抗する子どもや、門の側にずっと立っている子どもの姿が多く見られていました。自分ではそういう子どもの姿

が当たり前と思っています。

の中に初めて入ってきたのに、泣いたり戸惑いを
見せたりしないで、抵抗なく過ごしている子ども
たちの姿が多く見られるようになりました。泣か
ずに保育者の手を煩わせないでいる子どもたちの姿を
見て、泣かないから大丈夫。Ⅱ「もう慣れた」と
勘違いをしていることが多いのではないでしょう
か。

園までは、「うちの子は大丈夫でしようか」「慣れ
てくれるでしようか」と、心配でたまらない様
子。しかし、入園して二、三日過ぎると、「泣か
ない」「からうちの子は大丈夫と思い込み、明日か
ら、夕方までお願いします」と、連れてきます。

見たほうがよいのでは」と思う気持ちと、保護者

の「泣かないから大丈夫」と思う気持ちとの食い違いも度々です。

い子にしてなさい」とかなりプレッシャーを受けている子が増えたのか、表情が乏しく、自己発揮する子が減ってきているように思います。そこで私が出会ったのが、慣れたように見えていたA君です。

五歳新入園児のA君は、入園当初から、保育者を困らせることもなく、クラスの中にもスムーズに入っていました。保育者に甘えることもなく、何をさせても上手にできるので、いつの間にかクラスのリーダー的存在になり、皆からも頼られ、保育者もまた、頼もしく思っていました。運動会で竹馬に乗れたときや、あけびが沢山ある散歩

コースを教えてくれたときなど、注目を浴びることで自分をアピールしていたので「慣れた」と思っていました。

十二月のある寒い日、登園時、私の手が冷たかったので、A君の手を握ると「先生の手冷たいね、僕が温めてあげようか」と、自分から言ってきました。それから、毎日のように手を握ってくれたのです。これがきっかけで、すっかり甘えてくるようになり、自分を出してくれるようになりました。自分を出せるようになったときに私は、A君が本当に「慣れてきた」と実感を持つて思えたのです。

ゆっくり慣れたR君

園に慣れるというと、入園当初のことだけに限定してしまいがちですが、長期間をかけて慣れる子もいます。

四歳新入園児R君、四月当初から自分の部屋になかなか慣れずに、カバンもおどおどしながら置いていました。入園前から仲のよかった三歳児（女兒）と一緒に活動し、三歳児のクラスで過ごすことが多く、自分のクラスに入ってくることはまれでした。三歳児の担任と連携を取りながら、この間、R君との信頼関係を作っていました。

大分落ち着いてきて、三歳児の部屋で休息ができるようになったこともあり、五月後半、休息のとき自分の部屋に誘ってみました。「今日は寝なくていいから、皆の寝るのを見てみようか」と、部屋の隅に毛布を敷いて、他の子どもたちの寝姿を見ていました。翌日から、その毛布がR君にとって部屋にいることへの拠り処となりました。

数日すると自分から毛布に横になり、またクラスの子たちも「ここは、Rくんの」と言って、毛布を敷いてくれるようになりました。

六月に入ると、自分で毛布を持っていき友だちの側で寝られるようになりました。隣の男の子と話をしたり、冗談を言ったりしているうちに仲良くなり、昼食やおやつも一緒に座って、食べられるようになったりと、休息をきっかけに慣れていったのです。

R君のように、ゆっくりと時間をかけて慣れていった事例は沢山ありますが、実際は、「こんなに、一人に時間を採ってられない」ということになりがちです。そこで、必要になってくるのが、保育者同士の連携です。「自分のクラスの子ではないから、私は関係ない」ということにならないように、園全体で受け止めていくように心がけています。

子どもを追い立てないで

「泣かなくなったから大丈夫」「もう、二週間も

経ったから慣れただろう」と「慣れる」ということに「これくらい経ったらいいだろう」という固定観念で、保育者が一方的に枠決めをしてはいけません。子どもが時間の枠にはめられ、時間通りに追い立てられてしまったら、慣れる過程を身体で表現しきれないままに園生活を過ごしている状態になりかねません。「慣れる」ということは、慣らされることではありません。子どもが主体とならない限り「慣れる」ということにはならないと思います。

ある子は数日で慣れていきます。ある子は一か月かかる場合もあります。もしかすると、半年、一年かかって「慣れた」と思える子もいるかもしれません。

「泣かなくなったから慣れた」という単純なものではないと思います。「どうして、泣かないのか」「何がきっかけで泣かなくなったのか」「どん

な表情をしていたか」など、そこにいる、子どもの表情が大切になってくるのではないでしょうか。

「慣らす―慣らされる」という関係で子どもを追いつ立てるのではなく、子どもの表情をくみ取りながら、これからも、気長に「焦らず、ゆっく

と」というゆとりを持って、保育したいと思っています。

(安良保育園)

一年生が慣れるまで

橋本 由美



私は、学童クラブに勤務しています。学童クラブは、両親共働き等の理由で、学校から下校して

も家庭に誰もいない子どもたちが、放課後を過ごす施設です。学童クラブの子どもたちは、学校が